

令和五年度

中学校入学試験問題 国語

第二回（二月二日）

試験開始の合図があるまで問題用紙は開かず、左記の注意事項をよく読んでおきましょう。

- 一、問題は28ページまであります。足りないページや、印刷のよく見えないページがあったときは、手を上げて申し出てください。
- 二、解答用紙は別になっています。答えはすべてそこに記入してください。
- 三、解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。
- 四、問題用紙には、受験番号・氏名を書く必要はありません。

一 次の文章を読んで、後の1～13の問いに答えなさい（問題の都合上、本文を変えているところがあります）。

「お帰り」

背中が声でした。ビクツとして振り返る。いつもは、目が合ったときだけ挨拶する「おそうじばあさん」だった。

腰が九〇度くらいに曲がっていて、下を向いていて小さいから、わきを通っても気が付かないことが多かった。たいてい、事務所の前の花壇で何かしているか、道端で短いホウキを動かしている。だから「おそうじばあさん」。

今日も短いホウキで、木の葉や砂利を事務所の方へはいている。いつものように、道路まできれいにしているように見えた。背中にくっつけたみたいになり取りも持っている。ばあさんの周りでめだつようなゴミを見たことがない。

つられて、ただいまと返事したけど、聞こえたかどうか……。ばあさんもそのまま、ガラスのドアに金文字で「岩田造園」と書かれた事務所の中に入ってしまった。

いつも元気だ。動きのいいホウキではかれたら、飛ばされてしまうくらい、力強い動きだ。ふと、もう一度ばあさんを見たくなくて、足を止め、振り返ったときだった。

① とつぜん、この風景や音が、自分とつながったような不思議な気分になった。今まで眠っていたのか、今、目が覚めたのか、そんなことまであわてて確かめている。

コンコンとガードレールを指ではじきながら歩いて来た。ガードレールの向こうは、幅二メートルほどのコンクリートに囲われた新川が流れている。

新川は深くはないけど、底は自然のままだから、さざ波が立っている。だけど、六月の午後、

A

とした雲の下、日差しなんか

なくて、キラキラ光ることもない。

来た道を振りむく。青い日光連山の下に、住宅地の家々の屋根の上に西岡小学校の三階と四階が見えた。

学校を見て、さつき、学校前に住んでいる三人、連、悠真、朝日と別れたことまでを思い返す。五年一組早川淳という自分の名前まで、口に出していた。

——バカみたい。

そうだ、バカは今日、学校で何をしていたのだろう。社会、家庭、算数、書写と理科、帰りの会の前は科学クラブとまで思い出して、木曜日なのがわかった。

給食は生姜焼きだった。思い出そうとしないと、今日の自分が分からない。そんなにも朝のことはシヨックだった。まだ、頭から離れていない。大シヨックだ。家の稼業のそば屋が朝から休業している。

店のテーブルで、妹の梨絵と朝ご飯を食べていたときだ。

「うるせえ、ごちゃごちゃいわれて、そば屋なんかやってられるかってんだ。今日は休みだ」

奥の調理場の半分もある広くて大きい麵台の上に、麵棒を打ち付けて、そば粉を舞い上がらせ、父さんはこねて丸めたそばの玉をゴミ箱に放り込んだ。

「どうして、そんなに怒ることがあるのよ、ただ、私が夢の話しただけじゃない」

店にいた母さんまで、大きな声で応えている。

「うるせえ！ 昇竜が店出したからって、ラーメンと餃子のことばかり考えているヤツと、仕事なんかできるか」

「何いつているのよ、この季節、冷やし中華始めましたっていう張り紙出したいねえ、夏らしいし、そういうのいいなあって、いっただけじゃないの。そのどどこが悪いのよ」

「それだけいわれりゃ、十分だ。ラーメンと餃子やりたきゃ、どこにでも行くがいいわ」

カウンターをくぐり出た父さんは、新聞のチラシから、裏側が白いのを取り出すと、「本日休業」の張り紙を書いた。

父さんは、乱暴にレジの下の引き出しを開け、ガムテープを取り出して外に出た。張り紙をガラス戸のガラスに貼り付ける。一瞬
だったけど店の中まで暗くなった。

家でやっている「峠の田舎そば・柳団地店」は、二階建ての五軒ある店舗付きアパートの真ん中にある。

道路沿いの角にあった「昇竜」は、餃子が評判になって、半年くらい前に出ていって、他で店を構えた。「昇竜」の子、大木瑠
奈はクラスで自慢ばかりするイヤなヤツで、転校して行ったからせいせいしている。

——父さんたち、仲直りして、張り紙、はがしたかなあ。

今日はずっと朝の夫婦げんかのことばかり考えていた。それで学校の一日がはつきりしなかった。

そばが好きで、ぼくもそば屋をやりたいから、父さんに教わって食べられるそばが打てるようになった。

そば粉一〇〇パーセントの田舎そば。お供え餅みたいにまとめるまでに一年かかった。でも、もう少し幅を狭く切りそろえられ
ば、一人前だと父さんにいわれている。

新しいお店を出すのが、ぼくんちみんなの夢だ。今いる二階建ての狭い店舗付きのアパートから出たいけど……、お客さんたちと馴
染んだから、居心地がよすぎる気もする。

なのに、本日休業だなんて、父さんだって、夢は新しい店を出すことだと思う。「昇竜」のことなんか気にしているから、すぐ怒ってしまったんだ。

もうすぐ、日が暮れる。夕方早く来て、カツ煮でお銚子二本だけ飲んでいく、齋藤さんに叱られると思う。

齋藤さんは工務店の社長らしいけど、若い人たちは親方としか呼ばない。造園屋の岩田さん、基礎屋さんのトシくんやタケちゃんもそう呼んでいた。足場屋さんも来る。左官屋さんは家の塗装までやるから、ペンキまみれで来る。

お客さんのことも考えてしまう。心配だけど、一番気になったのは、父さんと母さんがケンカしたまま離婚したら、大変なこと、困ったことが起きるということだ。

同じクラスの田中翔太の両親が離婚して苗字が藤本に変わった。父さんの実家の海辺の家に行けなくなったという。

ぼくんちだってそうだ。妹の梨絵は母さんについていくだろう。ぼくはそば屋になるから、父さんといっしょだ。

離婚したら、梨絵と母さんに会えなくなる。悲しいことだ。(中略)

団地の通りに出た。かなり先のスーパーのところまで横断歩道はない。病院の隣に店舗付き住宅が見えてきた。通りを越えて新川の橋を渡る。胸がドキドキしてきた。張り紙がなくなっていたらいい……。一瞬目をつぶる。祈った。

——そば屋、やっていますように。

昇竜だった角の店のシャッターは下りたままだ。店の入り口はオオバコがはびこっていて、もう何年も人がいないみたいに見えた。すぐ「本日休業」の張り紙が目に入った。

とっているみたいに、へこんだり膨らんだりしている。

足が前に出なかった。隣の今川焼屋との境に生えたエノコログサなんか抜いている。そんな自分にハラが立った。
——「本日休業」なんか破り捨ててやる。

立ち上がったまでの勢いはよかったが、張り紙に触れた途端に力が抜けた。破り捨てたって、何にも変わらない。暗そうな店の中、母さんがいそうだ。お店のテーブルのイスに座って、スマホをいじっているのだろうか。

父さんは二階のテレビを独り占めして、ゴロゴロしているのか。それとも窓を全開にして——。昼寝なんかできないと思う。見上げると二階の窓が開いていた。

父さんも母さんも仲直りできないのかな。母さん、そんなにひどいことやってないのに……。

父さん、昇竜のことが気になるからいら立つのだ。ぼくが大木瑠奈を嫌っていたのと同じかもしれない。

家の前の細い通りを、見知らぬ人が通って行く。ここはぼくの家だからと言いつつ、ランドセルを下ろそうと肩かけに手をかけ、急いで片腕を抜いた。

一人で慌てている。もう片方の肩かけまで外れてしまった。斜めに、片手でぶら下げた格好になる。ランドセルのふたをしていなかったせいで、ペンケースが飛び出た。落ちてケースのふたが開く。エンピツと消しゴムが転がった。

通行人はいなくなっていた。消しゴムをつかむ。父さんの字は油性のマジックインキで書かれていた。消せない。ため息をつきながら、張り紙をにらんだ。

エンピツで大きく×を描いても……、字の上に線を引いても、マジックインキの線の力強さにはかなわない。まるで大人に負けてしまっう子どもみたいだ。

ふと、そうじばあさんのことが浮かんだ。

- a わかった気がする。
- b だから掃除そうじをしている。
- c ばあさんのできることをしていた。
- d どうして掃除そうじをしているのか、考えた。
- e そうじばあさんは、掃除そうじしかできないのかもしれない。

——自分でできること。

父さん母さんに仲直りしてもらいたい。でも、そう思うだけの今の自分は、張り紙をにらむだけだ。まだ、店の中にも入れないでいる。

休業は昼までで終わりにして、美味おいしい匂においのする、にぎやかなお店にして欲しい。父さんと母さんの元気な声も聞きたい。このままだと暗い日が続いてしまいそうだ。

楽しい雰囲気ふんいきで、父さんたちは変わるのかもしれない。ほくに何かできないだろうか。

ペンケースから一番目立つ、赤のボールペンを取り出した。そして、「本日休業」の横に、精一杯目立つように、「かもしれませんか」と書いた。斎藤さんがぼくの字を見つけて、父さんたちを叱ちってくれたら……、なんて考えた。

いつものように、ただいまといって店に入る。母さんがボソッとお帰りといった。つい張り紙の方を見てしまう。張り紙の裏のパチ

ンコ店の広告が見えた。

——見られたかな。

と思う。母さんは何もいわなかった。梨絵は畳をたてに二畳使った座敷で、座布団を枕に眠っていた。枕元にピンクのランドセルがある。二階に上がってない証拠だ。

父さんは一人で二階にいる。⑦店の中がまた暗くなった気がする。柱時計が五回、ポーンと鳴った。今から、そばを打ち出しても、お客の来る時間に合うだろうか。

ぼくがそばを打つのはどうだろう。父さんは、まだお客に出せるそばじゃないといっているけど……。

五時、工務店や基礎屋さん、足場屋さん、左官屋さんたち、外で働く人の仕事が終わる時間だ。事務所の中で時計ばかりを見ているという、社長の斎藤さんが会社を出る時刻のようだ。斎藤さんに早く来て欲しかった。

斎藤さんを期待して、チラチラガラス戸を見ていた。そんなときだ。

「すみませーん、ちよっと、すみませーん」

聞いたことがない若い人の声と、ガラスをたたく音がした。斎藤さんじゃないのは確かだ。すみませんなんていったのを聞いたことがない。

「ハイ」

母さんが、しばらく声を出したことがないような声で返事をして、ガラス戸に向かって走り出した。

足先にまでうれしさがあふれているように見えた。一日中、お客さんを待っていた感じがする。「本日休業」の張り紙がしてあっても、来てくれるお客さんがいる。

来てくれたら、二階の父さんと呼べる。冷蔵庫には予備の蕎麦の玉が入っている。その玉でお客さんが食べているうちに、新しいそばが打てる。ほくも知っている。

母さんが戸を開ける。左官屋さんの新人でヤンキーって呼ばれている人がいた。まだ名前は知らない。外が暑いから、涼しい店の中に入ってきた。用があったはずなのに、壁のメニューなんか見ている。注文する気はわかった。

何かいうのを待っていた母さんと目が合った。

「あ、今日はお店やるんですね、張り紙見たら、かもしれませんでしたからハハハ。明日雨だつていうんで、仕事、夜中までになつて、晩飯、会社で出してくれるから、カツ丼頼んでいっていうから、五つ」

「ええ、カツ丼は大丈夫ですよ。張り紙、なんですか」

二階に聞こえるような声でいって、母さんが階段を見上げた。父さんが下りてくる音がする。梨絵が起きた。

「へえ、いらつしゃい。夜中まで仕事する人がいるのに、寝ているわけにはいかないわな。ははは、病気じゃねえよ」

「あのう、ここでは冷やしタヌキはやってないんですか」

ヤンキーさんが聞いてきた。

「おれんとこ、田舎そばだから、町のものは……」

冷やしタヌキそば、いいと思った。夏に合う冷やし中華じゃないけど、張り紙が出せたら母さんもきつと喜ぶ。

母さんを見た。やっぱりうなずいている。

「冷やしタヌキそば、作れるよねえ」

母さんが父さんに聞いている。

「ああ、うん」

なぜか笑い出しそうな顔をしていた。

「タヌキを冷やすから、冷やしタヌキなの」

梨絵が立ち上がって聞いた。

「池で涼すずんでいるんだろ」

父さんがでたらめなことをいう。

「カツ丼、事務所までお願いします」

仲間外れにしてしまったヤンキーさんが出ていった。

「毎度ありがとうございます」

父さんと母さんの声がそろった。

⑨「じゃあ、張り紙、作らなくちゃ」

ほくがいうと、お絵かき大好きな梨絵が絵を描くといった。タヌキが池で涼んでいる絵を描くと思う。父さんが張り紙をはがしに行った。「かもしれません」を見たはずだ。

(高橋秀雄『本日休業 かもしれません』による)

問1 ―線①「とつぜん、この風景や音が、自分とつながったような」とあるが、「自分とつながる」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 風景や音に影響えいきょうされて自分の心が変化するということ。

ロ 自分の思い通りに風景や音が描けるようになるということ。

ハ 自分の心が目に見える景色や音に現われているということ。

ニ 意識がぼんやりし、夢と現実の区別がつかなくなること。

ホ ぼんやりしていた意識が明瞭めいりょうになり、正気にもどること。

問2 A に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ うんざり ロ しっとり ハ すっきり ニ どんより

問3 ―線②「朝のこと」とは具体的にどのようなことか。二十字以内で説明しなさい。

問4 —線③「せいせいしている」の「せいせい」を漢字に直したとき、正しいものを次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 正々
- ロ 青々
- ハ 清々
- ニ 盛々
- ホ 静々

問5 B に当てはまる表現として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ お前は結局そういうやつなのだ
- ロ 店の中に入ってくれないかなあ
- ハ 良いお天気なのに、残念ですね
- ニ 世の中、そんなにうまくいくか

問6 —線④「破り捨てたって、何にも変わらない」とあるが、「ぼく」は今の状じょうきょう況きょうからどのように変わることを望んでいるか。それがわかる三十五字以上四十字以内の一文を文章中から探し、最初の三字をぬき出しなさい。

問7 — 線⑤ 「母さん、そんなにひどいこといってないのに……」とあるが、「母さん」はどのようなことを言ったのか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 「昇竜」のかわりに中華料理も売り出すという張り紙を出したいということ。
- ロ 自分たちも客を呼びこめるような看板商品の張り紙を出したいということ。
- ハ 夏らしいメニューを開始したことを知らせる張り紙を出したいということ。
- ニ 「昇竜」をまねて冷やし中華始めましたという張り紙を出したいということ。

問8 — 線⑥ 「ここはぼくの家だからと言いつける」とあるが、なぜ「言いつける」必要があるのか。その理由として最も適当なもの、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 店の前にずっと立っているのを周囲に変だと思われなくなかったから。
- ロ 「本日休業」の字を消そうとしてペンケースを取り出そうとしたから。
- ハ 「父さん」たちがケンカを続けている家の中に入りたくなかったから。
- ニ 元気なふりをして帰宅することで店の雰囲気を変えようと思ったから。

問9

で囲まれた部分にあるaとeは、元の文章と順番が入れかえてある。正しい順に並べかえたものを、次の中から一つ

選んで記号で答えなさい。

イ d↓a↓e↓b↓c

ロ d↓c↓b↓a↓e

ハ e↓a↓b↓c↓d

ニ e↓a↓d↓c↓b

問10

——線⑦「店の中がまた暗くなった気がする」とあるが、このときの「ぼく」の気持ちの説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 妹が店内を暗くして眠っているので、「父さん」や「母さん」がお客さんに叱られるのではないかと心配している。

ロ 「父さん」の病気やお店の休業のことが頭から離れず、目の前が真っ暗になるような絶望感に打ちのめされている。

ハ 張り紙にいたずら書きをしたことがばれて、「父さん」や「母さん」に叱られるかもしれないと不安になっている。

ニ 夕方になり店内が暗くなって、両親のケンカへの不安や開店時間がせまることへのあせりがいつそうつのっている。

問11 — 線⑧「明日雨だつていうんで、仕事、夜中までになつて」とあるが、これは具体的にどのような「仕事」か。十字以上十五字以内で説明しなさい。

問12 — 線⑨「じゃあ、張り紙、作らなくちゃ」とあるが、「ぼく」は「張り紙」に何と書くと思うか。十字以上十五字以内で自分で考えて答えなさい。

問13 この文章の特徴として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 場面がめまぐるしく転換てんかんされることで、読者は物語の世界にひきこまれ一気に読み進めることができる。
- ロ 主人公の視点から物語全体が描かれることで、主人公の体験を読者が一緒いっしょになつて味わうことができる。
- ハ 情景描写びようしゃが多く用いられているので、読者は主人公以外の登場人物の心情までも理解することができる。
- ニ 登場人物の心情が直接的には表現されていないので、読者は想像を膨らませながら読むことができる。

二

次の文章を読んで、後の1～14の問いに答えなさい。(問題の都合上、本文を変えているところがあります。※のついた説明は出題者が加えたものです。)

日本はカワラバトの原産地から遠く離れているので、野生のカワラバトがいることはない。したがって人間が持ち込んだと考えるのが自然である。人によって本来の生息地とは違う場所に放され、定着した生物を外来種と呼ぶが、この定義からするとドバト(※カワラバトを品種改良したハト)は外来種となる。

ドバトが日本に初めて連れてこられたのは、古墳時代の西暦三九一年で、倭が朝鮮へ出兵した際に持ち帰ったという説がある。ただ、いくつかの書籍にこのことが載っているが、確かな記録は見つけられなかった。どういう経緯でどんなハトが日本に連れてこられたのか、本当のところはよくわからない。

奈良時代になると、日本にドバトがいたと思われる記述が見つかる。七九七年の『続日本紀』には、六九九年に河内国から、七二〇年に太宰府からそれぞれ白鳩が献上されたことある。白いハトとあるから、これはまさにカワラバトを品種改良したドバトのことだ。ハトに限らず白い生きものはおめでたいもの、縁起のよいものだからと、天皇に献上しているシーンが目に見えかぶ。どうやら奈良時代には、愛玩用として白いドバトが日本にいたことは確かとみてよいだろう。多くの書物に、日本のドバトは奈良時代に日本に入ってきたとあるのは、これが根拠である。

さらに時代が進み、平安時代の『源氏物語』には、ドバトを意味する「いへばと」が登場する。でも、竹藪の中から声が聞こえたことと書いているから、ドバトじゃない気がする。なぜならドバトは竹藪にはいないと思うからだ。平安時代中期の九三四年に書かれた日本最初の漢和辞典『倭名類聚抄』には、「やまばと」は鳩、「いへばと」は鳩と載っており、その頃には野鳥のキジバトやアオバト

と家禽^{かきん}のドバトは区別されていたことがわかる。A もドバトとキジバトの違い^{ちが}まではわからずとも、「いへばと」という鳥が日本に在るといふ知識は持ち合わせていたのかもしれない。

平安時代から鎌倉時代には、皇族や貴族の間でドバトをペットとして可愛がっていた記録がある。例えば、藤原頼長^{ふじわらのよりなが}が書いた『台記^{たい}』という日記には、一二三年に藤原頼長が崇徳上皇^{すとしじょうこう}から「家鳩^{いえばと}」をもらったという記述があり、この鳥は「頭が長く色が白く、頭部に冠^{かんむり}があり、足に毛が生えてよく人になれている」とあるから、ドバトの品種なのは間違いない。

さらに面白いのは、鎌倉時代の一二〇八年に京都で起こった朱雀門^{すざくもん}焼失事件^{しょうしつじ}である。この火事はよっぽどの大事件だったみたいで、『吾妻鏡^{あづまかがみ}』や『明月記^{めいげつぎ}』『猪隈関白記^{いのくまかんぱくぎ}』『百鍊抄^{ひやくれんしょう}』など複数の日記や歴史書に記述があり、なんでもその出火原因はハトだったという。当時の朱雀門にはハトが営巢^{えいそう}していて、ヒナを捕^とろうとして火事になったのだ。おそらく巢は暗いところにあつたのだろう。松明^{まつ}で照らして探していたら火が門に引火。全焼してしまったのだ。

さらに『猪隈関白記』によると、ハトを捕れと命令したのが後鳥羽上皇^{ごとばじょうてう}だというから興味深い。上皇は無類^{むるい}のハト好きだったようで、珍しいハトを手に入れたくて、捕ってこいと命令したのだろうか。また、そのハトは「唐鳩^{からばと}」であつたというし、営巢^{えいそう}の状況^{じょうきょう}から考えても、間違はなくドバトである。ということはこの時代にはすでに街なかに野生化したドバトがいたことになり、私は激しく興奮してしまうのだ。

また、『吾妻鏡』には「近年天子上皇みな鳩を好^{たも}みたまふ、長房卿^{ながふさきやう}、保教等^{やすのりとう}、本より鳩を養^ひひ、時をえて奔走^{ほんそう}す（※最近天皇・上皇はみなハトをお好みになる。長房卿、保教らは元々ハトを飼い、この時とばかりハトを差し上げようと一生懸命^{いっしょうけんめい}になっている）」とあり、この火事が起こった背景には過熱したハト飼育があるのではというのだ。どうやら当時の皇族の間ではハト飼育が大ブームになっ

ていたことがうかがえる。

平安時代末期くらいから、なぜかハトは戦いの神様の使いとなる。

戦いの神様、すなわち八幡宮はちまんぐうでは、ハトを神様の使いとしてシンボルにしている。^④有名などころでは、京都の石清水八幡宮いwashimizuはちまんぐうや鎌倉の鶴岡八幡宮つるがわか八幡宮がそうだが、どちらの神社も扁額へんがく（看板）の「八」の字が、向かい合わせのハトの図柄ずがらになっているのはまさにシンボルバードだからだ。B、鶴岡八幡宮では、白いハトを今でも飼育しているし、参道にハトの形をしたお菓子かし「鳩サブレ」を売る店があるのも、シンボルがハトということにちなんでいる。

C、なぜ八幡神社のシンボルがハトなのだろうか。八幡神社は九州の大分県にある宇佐神宮うさじんぐうが総本宮とされる。その宇佐神社から分霊ぶんれいして京都の石清水八幡宮を造る際に、金色のハトが現在の場所へ導いたという話や、東京の鳩森八幡神社はとのもりはちまんじんじやでは、藪の中から白いハトが飛び出し、そこに神社を建てたという伝説がある。

^⑤温厚おんこうなハト派である鳥が、戦いのシンボルとなるのは意外な感じがするが、これは源平合戦のときに、ハトが現れると勝利したという伝説にちなみ、源氏の勝利の背景には八幡神の加護かごがあり、ハトはその象徴しょうちゆうとされたからである。D 勝利をもたらす瑞鳥ずいちゆうなのだ。

鎌倉時代以降、日本は武家社会になり、戦いの神である八幡信仰しんけんじゆうはますます広がっていき、各地に八幡神社が建てられるようになった。E、ハトは八幡神の使いとして大切にされ、人々に受け入れられてきたのではないだろうか。

鎌倉時代以降、八幡信仰の広まりとともに、ドバトは神社をすみかとして全国に広まっていったと思われる。さらに時代が進むと、

神社だけでなく寺院にもドバトがいたようだ。それは室町時代には「塔鳩」、安土・桃山時代には「堂鳩」と呼ばれるようになったこととわかる。塔とは寺にある五重塔、堂とは本堂のことだからだ。さらに江戸時代になると、「堂鳩」が転じて、「土鳩」と呼ばれるようになった。ここにきて、ようやくドバトという名前が登場するのである。

では、^⑥どうしてドバトは神社仏閣をすみかとするようになったのだろう。それはこの鳥が持つ独特の習性が関係している。(中略)

^⑦高い崖の岩棚や穴に巣を作り繁殖し、繁殖が終わってもずっと崖をマイホームのようにして暮らす習性がある。

日本に連れてこられたカワラバト、すなわちドバトは、野外に放されたら自分たちでマイホームを見つけなければならぬが、残念なことに森林国である日本にはエジプトのナイル川にあったような岩の崖がない。そこで^⑧□をつけたのが神社や寺院の大きな建造物だ。とくに五重塔なんかは最高だ。まるで中東にあるピジョンタワー(※ハトのための塔)みたいな構造の建物なので、ここならばマイホームとして暮らしていけると確信したに違いない。

また、当時の日本の街には、神社仏閣以外に崖の代わりになるようなそびえ立つ大きな建物はないから、ドバトのマイホームは神社や寺に求めるしかなかったことが想像できる。こうした理由で、ドバトは神社仏閣の鳥になったのではないだろうか。

もう一つ重要なのが、食べものである。^⑨神社や寺はドバトにエサをやる人がたくさんいる。つい最近まで、ハトのエサを売る自動販売機が設置してある神社もあった。いつの時代からドバトにエサをやっていたか、記録をたどるのは難しいが、少なくとも江戸時代にはやっていたのではないか。神の使いであるハトにエサをやることは、善行であり、誰一人とがめる者はいなかったであろう。

昭和初期にあたる一九二九年頃に、東京近郊のドバトの生息状況について調査した資料によれば、護国寺に約二〇〇羽、鬼子母神に三〇〇羽、池上本門寺に三〇〇羽など、ドバトがいたのは神社仏閣に限られていて、予想に反して生息している場所が F と報告

している。また、東京の多くの神社仏閣では、ドバトを繁殖させるために巣箱の設置やエサの販売を積極的に行っていたという。

ドバトが神社や寺の鳥だったことは、おそらく第二次世界大戦後の一九五〇年代くらいまで続いていた。今でも高齢の方にドバトがどこにいるかと尋ねると、神社か寺という答えが返ってくるのはそのためだろう。神社仏閣はドバトにとって、食と住居が完璧に揃った理想的なマイホームだったに違いない。

長い間、神社仏閣の鳥であったドバトだが、一九五〇年代になると状況が変わってきた。もうその頃になると、現在と同じように公園や駅前など、^⑩街なかのさまざまな場所でもドバトの姿が普通に見られるようになっていた。何があったのだろうか。

一九五〇年代といえば、日本は戦後復興の真っ只中である。焼け野原だった東京都心部では、コンクリート造りのビルがニョキニョキと建ち始めた時期だ。一九六〇年代になるとその流れはさらに加速し、郊外にまで団地がどんどん建設され、高速道路の高架もあちこちに延び始めていた頃である。また、木造の駅舎も駅ビルへと姿を変えていった。崖をマイホームにするドバトにとって、コンクリート製の建物はナイル川の崖と同じに見えたのだろう。マンションのベランダは、まさに崖の棚と同じ構造なので、巣を作ってくさいと言わんばかりだ。地上に近い場所よりも、高さがあるほうを営巣場所として好むようで、これはおそらく天敵であるネコなどのほ乳類が近づきにくいからだろう。驚いたことに、超高層ビルである新宿三井ビルディングの地上二〇〇メートルにドバトが営巣したことがある。これは世界でも有数の高さにあった鳥の巣ではないだろうか。

日本の街は、長い間、平屋の住宅が主で、高さのある建物は神社仏閣くらいしかなかった。そのためドバトは神社仏閣でしか営巣できなかったが、一九五〇年代以降になるとさまざまな建造物は高層化が進み、ドバトが巣を作るのに嬉しい崖のような場所がどんどん出現した。それはもはや神社や寺とは比較にならないほどの数となり、ドバトのマイホームを無尽蔵に提供したのである。

(柴田佳秀『となりのハト 身近な生きものの知られざる世界』による)

問1 — 線①「これ」が指す内容として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 古墳時代に、倭が朝鮮へ出兵した際にドバトを持ち帰ったという説があること。
- ロ 奈良時代に、愛玩用として白いドバトが日本にいたのは確かであるということ。
- ハ 『続日本紀』の中に、奈良時代に二度「白鳩」が献上されたという記事があること。
- ニ 『倭名類聚抄』の中に、平安時代にドバトが日本に入ったという記述があること。

問2 A に当てはまる『源氏物語』の作者名を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 紫式部
- ロ 小野妹子
- ハ 清少納言
- ニ 樋口一葉
- ホ 与謝野晶子

問7 — 線⑤ 「温厚なハト派」とあるが、「ハト派」の対義語として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ キジ派 ロ サギ派 ハ タカ派 ニ カラス派 ホ ニワトリ派

問8 — 線⑥ 「どうしてドバトは神社仏閣をすみかとするようになったのだろう」とあるが、この問いに対する答えとして最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 川の側にそびえ立つ大きな建物があり、快適に生活できる場所が確保されていたから。
ロ 崖の代用となる大きな建造物があり、さらに食べものも豊富に得ることができるから。
ハ 八幡信仰が広がったことで、神社仏閣内では神の使いとされますゆうぐうます優遇されたから。
ニ ハトにエサをやるのはよいことだと考えて、ひそかにエサをあた与える人が多かつたから。

問9 — 線⑦ 「高い崖の岩棚や穴に巣を作り繁殖し、繁殖が終わってもずっと崖をマイホームのようにして暮らす習性がある」とあるが、それはなぜか。その理由を述べた二十二字の表現を文章中から探し、最初の三字をぬき出しなさい。

問10 — 線⑧ 「□をつけた」の「□」に当てはまる体の一部を表す言葉を、漢字一字で答えなさい。

問11 — 線⑨「神社や寺はドバトにエサをやる人がたくさんいる」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ ドバトは縁起がよく、平和をもたらすおめでたい存在だったから。

ロ ドバトは八幡神の使いとみなされ、信仰するべき存在だったから。

ハ ドバトは神社仏閣の人集めのために、利用しやすい存在だったから。

ニ ドバトは珍しい鳥で、天皇にまで献上された貴重な存在だったから。

問12

F

 に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 暗い ロ 広い ハ 新しい ニ 少ない

問13 — 線⑩「街なかのさまざまな場所でもドバトの姿が普通に見られるようになってい」とあるが、それはなぜか。文章中の言葉を使って、二十字以上三十字以内で答えなさい。

問14 この文章の内容に合っているものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 「ドバト」は安土・桃山時代に「堂鳩」と呼ばれるようになって、そこから転じた名称が定着した。
- ロ 「ドバト」は日本最初の漢和辞典で「やまばと」と呼ばれており、「いへばと」と区別されていた。
- ハ 「ドバト」は日本に元々いた種の鳥であり、過去の文献にも何度も登場するなじみ深い存在である。
- ニ 「ドバト」は昔から街なかにいるイメージを持つ鳥であり、どの世代の人々にも身近な存在である。

三二

次の文章は若山牧水の短歌と、その鑑賞文である。これを読んで、後の1〜5の問いに答えなさい（問題の都合上、本文を変えているところがあります）。

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

若山牧水

（白い鳥よ、かなしくはないか。空の青さ、海の青さにも染まらずにただよっている **A** な白い鳥よ。）

「白鳥」はスワンではなく、ふつう海にいる白い鳥で、かもめなどを思いうかべればいいでしょう。青い空、青い海、そこにただよ
う純白の鳥。この歌の高い人気の秘密の第一は、明るく鮮明な、この青と白のコントラストのあざやかさにあるようです。（中略）油
絵風なタッチ、古典的和歌とはちがう色彩感覚がここにはあります。

この歌は、明治四〇（一九〇七）年に発表されてまもなく、当時の青少年の間で大評判になったようです。心に **B** くるところ
ろがあったのでしょうか。一つはいま言ったカラフルな世界の新鮮さが魅力だったのですが、それだけではなさそうです。もっと
彼ら自身の生、まじめな問題とどこかで関係していたのだろう、というのが私の考えです。

③ 全面が青くぬられた画面に、白くぬり残された部分がある。それが「白鳥」なのだ、というふうに読めませんか。「白鳥」は、青の
世界の中で白い自分を主張している、というよりも、青く染まれない自分を悲しんでいるように感じられませんか。周りの人たちと
どこがちがっている自分、周りにとってゆけない自分、そんな自分を悲しんでいる気持ちがあるように私には思えます。

（佐佐木幸綱『ジュニア版 目でみる日本の詩歌⑧ 近代の短歌』による）

問1

A に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 臆病 おくびょう ロ 孤独 こどく ハ 自由 ニ 正直 ホ 平和

問2

——線①「古典的和歌」とあるが、次の中から「古典的和歌」を、二つ選んで記号で答えなさい（引用の和歌や短歌は、すべて

はまじま 浜島書店『国語便覧』による）。

- イ 海を知らぬ 少女の前に 麦藁帽むぎわらぼうの われは両手を ひろげていたり
ロ 草わかば 色鉛筆いろえんぴつの 赤き粉この ちるがいとしく 寝ねて 削けづるなり
ハ ちはやぶる 神代かみよもきかず 竜田川たつたがは からくれなるいに 水くくるとは
ニ 花の色は 移りにけりな いたづらずに 我身世わがみよにふる ながめせしまに
ホ 向日葵ひまわりは 金の油を 身に浴びて ゆらりと高し 日のちひささひよ

問3

B に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ うんと ロ つんと ハ どんと ニ ぴんと

四

次の文の——線のひかれたカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

- ① 着物の虫ボしをする。
- ② 市長のコウセキをたたえる。
- ③ メンミツな計画を立てる。
- ④ 持論をおし通す。

本校の許可なく、掲載内容の一部およびすべてを複製、転載または配布、印刷するなど、第三者の利用に供することを禁止致します。